資 料 5

第１０回長崎大学における感染症研究拠点整備に関する
地域連絡協議会議事要旨

１　日時　平成 29 年 5 月 23 日（火）17:00～19:40
２　場所　長崎大学医学部良順会館専斎ホール（１階）
３　出席者数　26 名　調（議長）、山下（副議長）、石田、北島、久米、道津、松尾、梶村、山口、原、犬塚、神田、木須、寺井、藤原、丸田、泉川、里、鈴木、福﨑、宮﨑、村田、髙木、平山、森田、早坂の各委員
４　欠席者数　２名　蒔本、安田の各委員
５　オブザーバー
　小林秀幸（文部科学省研究振興局先端医科学研究企画官）
６　事務局（長崎大学）
　安藤豊幸（感染症共同研究拠点施設・安全管理部門担当課長）、嶋野武志（同拠点地域連携部門教授）、阿南圭一（同拠点総務部門担当課長）、伊東沙也加（同部門部門員）、山﨑雅彦（研究国際部長）、堤達行（施設部長）、
７　議事
(1) 委員の紹介等
　事務局（阿南課長）から、平成 29 年度の本協議会委員について、資料２及び資料３に基づき公募結果及び委員の交代等の報告があった後、調議長から新任委員を代表して犬塚委員に委嘱状が手交され、新任の犬塚委員、丸田委員及び梶村委員から就任挨拶があった。

(2) 事務局からの報告事項
　事務局（山崎部長、堤部長、伊東部門員）から、長崎大学感染症共同研究拠点の設置、地盤調査の実施、ドイツ高度安全実験(BSL-4)施設視察について、それぞれ資料４－１、４－２、４－３に基づき報告が行われた。その際、道津委員から次のとおり発言があった。

（道津委員）長崎の皆様に向けて言いたい。BSL-4 施設の設置について、場所が問題であることを１年間指摘してきたが、無視されてきた。私たちが一生懸命反対の意見を言えば何とかなると期待されているかもしれないが、非常に難しい。自分で大きな声を上げて欲しい。

　その後、ドイツ視察に参加された北島委員、久米委員、原委員、寺井委員から感想が述べられ、質疑応答が行われた。その大略は以下のとおりである。

（北島委員）書類では説明を受けていたが、百聞は一見にしかずであった。街に溶け込んでいるという印象が非常に強かった。研究所の建物の中に BSL-4 施設の建物があり、二重構造みたいになっていた。安全について、徹底したものが既に出来上がっているという感じがした。非常に勉強になったので、長崎での検討に活かしたい。

（久米委員）大変な強行軍であった。ロベルト・コッホ研究所は全て二重ドアで、空気感染を防止するためのフィルター設備とか、出来上がった施設であると思った。
　研究者から、長い時間をかけて信頼、絆、コミュニティを大事にしていかなければならない、インフラのことを考えると市街地の中心に造るのも一つの方法ではないか、施設上

のミスがないように責任をもって検査に最善の注意を払いたい、といった話があった。
　もし万が一飛行機がこの施設に落ちたらどうなるか質問したら、その時は熱で病原体も全部焼けてしまうとさらっと言われ、安心・安全を絶対的に確信していると感じた。
　ベルンハルト・ノホト熱帯医学研究所は賑やかな街にあり、BSL-4 施設以外に BSL-3 施設を３つ有する歴史ある施設であった。計画から稼動、維持費にかなりのお金をつぎ込んだということで、安全・安心にはお金がかかることを実感した。セキュリティの万全さが目についた。
　フィリップ大学マールブルグ校は学園都市の中に施設があり、学生も含めて前向きに和気あいあいと支え合い、共存共栄していた。

（原委員）３施設とも非常に特色があった。ロベルト・コッホ研究所は最先端の素晴らしい施設であった。セキュリティも訓練計画もしっかりしていた。研究者の命を守るための措置にしっかり力を割いているところも見受けられた。
　ベルンハルト・ノホト熱帯医学研究所は、港町で歴史がある建物の中に建設されており、ちょっと狭い中にギュウギュウに押し込まれたような施設で、ＥＵ全域から研究者を受け入れているという特色があった。
　一番特徴的だったのは大学の中にあったマールブルグ校である。昔、マールブルグ熱がこの土地で発生したことから、地元ではむしろ命を守るための研究がこの施設で行われているという理解が深まっているような印象を受けた。
　テロに対する心配の声は地域からあがらなかったのかと質問したところ、アフリカに行ってサルを捕まえてきた方が、病原体を入手する方法としてよっぽど簡単であり、テロリストはこんな難しいところは狙わない、と言われたのが印象的であった。
　３施設とも存在意義がそれぞれあり、大学は自由な研究のため、ＥＵはＥＵの研究者のため、国がお金を出すところは国の研究を深めていくためなど、それぞれの貢献の目的がしっかりと打ち出されている施設であった。

（寺井委員）今回のドイツ視察は、全ての施設が市街地あるいは住宅近接地に設置されているということであった。最初から市街地ありきという目で見てきたわけではないが、今設置されている場所が施設を最大限に機能させるための様々な要件を満たしている場所という単純明快な理由だったのではないかと思った。
　どこかの施設では、市街地に施設を造る時に住民の方々の反対は多かったそうである。説明によれば、地域の住民に施設の必要性、立地の合理性等を地道に説いて回り、集会も開き、施設やウイルスの危険性を公開し、安全対策を繰り返し説明されたとのことで、その広報活動は今でも継続しているとのことである。
　特に、問題意識が高いドイツ市民がセミナーや広報活動に参加し、大多数の市民の方が施設の市街地設置を肯定的に受け入れ、その結果、ベルリンにしてもハンブルグにしても、多くの人が住む市街地の中に出来たのではないかと思う。
　施設周辺の経済活動や生活状況を見て、施設があることの違和感は全く感じなかった。

（木須委員）感染症研究拠点の設置、地盤調査の実施といつの間にか坂本に設置する前提で進んでいる。住民の理解が大前提という、その前提は成り立っていない。なんで既成事実を作ることばかりしているのか。
　住民は設置に合意出来ない。国は国策と言いながら、一度も坂本設置を推進すると言っていない。大学が坂本に設置したいと言うからオーケーだけど住民の理解は得なさい、といまだに言っているはずである。そうですよね。

国は、万が一事故が起きたら職員を派遣して事態を収拾すると言っている。さらに有識者会議の論点整理では、どれだけ努力してもリスクがゼロにならない以上、地域にとってのメリットの有無を併せて検討すべきだと言っている。つまり、リスクはゼロにならないことを前提に話をしている。絶対安全、リスクはないとは国も言っていないし、大学も言っていない。住民は、万が一のリスクがゼロにならない限り、施設設置を絶対に受け入れられない。施設設置のリスクはゼロになることはないから、住民は坂本設置を容認することはない。絶対反対である。国も今のままでは、もし万が一事故が起こった時に住民の責任になる。

（調議長）要点をまとめていただけないか。

（木須委員）住民は反対である。国はもし万が一のことが起こったら、その責任は住民にあると今言える立場である。それは長崎大学に造っていいと言ったが、それは地元の住民の理解が得られてからの話である。すると、ここに造ったということは、住民が容認したということになる。すると、国は、ここに造ったこと自体が、住民が容認したということになる。すると、国の責任は何も問われないことになる。すると、長崎大学は原発のあの事故と一緒で、何も責任を取れない。

施設を造ることを前提にして基本構想とかを作成しており、それがおかしいと言っているわけである。

（調議長）反対のご意見があることは十分認識している。昨年の１１月に長崎県と長崎市から施設整備計画の事業化に協力することで合意をいただき、その結論をもって国と協議したという認識である。

（木須委員）市長とかが容認発言をしたが、住民が容認したという根拠はない。現に、多くの住民が反対している。そういうことを見極めないと、トップが容認したと言えば、それで済むのか。

（梶村委員）住民の同意というのが事業を進める上での前提になっていると理解している。議長は長崎県知事、長崎市長が住民を代弁するものであるという考えでの回答なのか。木須委員はここに住んでいる人という意味で住民と言っており、議長は県、市が同意すれば住民の同意ということで捉えており、そこがかみ合っていない。

（調議長）県や市が同意したことで住民が全て同意しているとは理解していない。反対の意見があることも承知の上で、どういう施設を造れば安全なものにできるか、という議論を進めたいと思っているし、この協議会も理解を得ながら前に進むという趣旨でやっていきたいと思っている。

（木須委員）説明すればいつか住民が理解してくれると思っているのか。リスクがゼロになる状態が有り得るのか。

（調議長）この会議にももちろん理解されていない方もいらっしゃると思うが、ご理解いただいている委員もおられると考えている。

（木須委員）この協議会に出てきている個人の人が理解しても、住民とは関係ないと自ら断言しており、住民の理解にはならない。

（調議長）委員ご自身が住民であり、住民の理解と関係はあると思う。

（木須委員）ないでしょう。そういう人たちは住民の意思を反映しないと、自ら堂々と宣言していたではないか。もう１つ、先ほど世界最高水準という話があった。

（調議長）このあと基本構想については詳細に説明するので、そのあとでお願いしたい。

（木須委員）後ではうやむやになるので今お聞きしたい。基本構想のところの質問も沢山ある。先ほど「世界最高水準」と言われたので今質問したい。世界の設備の中ではどこが優

れていて、どこが足りなくて、どこを優れたものにしようとしているのか。
（調議長）この後、基本構想の内容を説明させていただいてから質問を受けるので、その時にお願したい。

（神田委員）資料４－１にバイオセーフティオフィサーのところに「独立的立場」と書いているが、前回この協議会で、大学で雇用するのはおかしい、大学とは直接関係のないところで雇用しないと本当の意味での監視は出来ない、という話があったが、その説明がなかったのではないか。
（調議長）その件も次の議題である基本構想の中で少し詳しく記載しているので、基本構想の説明の中で、説明する。

（神田委員）資料４－２で地盤調査に関する説明があったが、地質調査は行わないのか。
（事務局（堤部長））今年度の調査で土地の地質を調べ、構造計画の参考にしたいと考えている。

（道津委員）先ほどドイツ視察の報告の中で、周りの住民の反対があったが、いろいろと説明をきちんとしたら稼動が承認されたと説明があった。それは住民と大学の先生方との信頼関係によるものだと思う。
　以前、山里中央自治会の説明会で、学長が「長崎は原爆を乗り越えたのだからエボラも乗り越えられる」という発言をしたのを聞いた。また、平野町山里自治会の説明会では、坂本に設置できなかったら、大学病院ごと行ってしまうがそれでもいいのかと、脅しのような発言があったとも聞いた。
　また、施設の安全点検に関しても、ウイルスを死滅させるのに重要な機器であるオートクレーブの点検結果のコピーの使い回しなどいろいろな問題点が指摘された。些細なことから大きな事故に繋がる。
　大学の先生がきちんとやっていれば、坂本設置にも理解できるということになるかもしれないとも思うが、いろいろと問題点があり、ドイツにおける施設と先生方との関係とはちょっと違っており、説明がきちんとされればそれで住民が納得するというものではないと思う。
（調議長）学長発言については、いろいろ確認したが、浦上の地で原爆を受けて、そこから共に復興を歩んだ同士として信頼関係があるという趣旨のことは言ったことがあると思うが、原爆を乗り越えたからエボラも乗り越えられる、という発言はしていないと思う。次回、資料として提出したい。
（木須委員）そういう加計学園みたいなことを言うから信用できないのだ。書き起こした紙の資料ではなくテープそのものを聞かせてもらいたい。
（寺井委員）長崎大学の先生を信じられないという発言であったが、大学関係者と視察の際にいろいろと話をしたが、十分に信頼できると感じた。
　また、絶対安全ということはないので、できるだけリスクを小さくしていくことがこの協議会の目的であると思う。

（山下委員）資料４－１に「危機対応部門（臨時に設置）」とあるが、危機的対応が必要となっている時に、本当に臨時に設置することができるのか。指揮命令系統はその時に話し合って決めることになるのか。
　また、資料４－３の「ドイツの３つの施設のまとめ」の「利用者の条件」の欄に「バックグラウンドチェック」と記載されている施設と記載されていない施設がある。ドイツで

はバックグラウンドチェックをするかどうかはそれぞれの施設に任されているのか、それとも国が定めた基準があるのか。
（事務局（阿南課長））危機対応部門の設置については、長崎や国内、世界で、感染症の発生や蔓延の恐れが生じたなどの危機事象に応じて、各部門のスタッフが集まって対応するということを考えているが、詳細は今後検討したい。

（梶村委員）危機対応部門とは、施設で何か事故が起きた時に対応する部門なのか、それともパンデミック等が起きた時に対応する部門なのか。
（事務局（阿南課長））施設で事故が起きた時に対応する部門ではない。資料５－２の６０ページに記載しているが、日本国内、特に長崎などに一類感染症などが発生した時に、普段は研究等を行っている部門が対応に当たるということである。
（梶村委員）この施設からウイルスが漏れたりすることを一番心配しているが、そういった時に危機対応部門がどう対応するのか基本構想の中に記載してあるのか。
（事務局（阿南課長））事象ごとの対応は違ってくる。リスクを評価し、対応、態勢等を検討した上で、安全対策マニュアル等を整備する予定であるが、詳細は今後の検討課題である。
（梶村委員）スケジュールでは平成２９年度の３分の１ぐらいのところからマニュアル等の整備となっている。この協議会がマニュアル等について意見交換を行う場となるのか。
（事務局（阿南課長））基本構想の中に少し記載しているが、緊急時の地域との連絡体制について、この協議会やこの協議会に来られない住民の方々と対話する場を設け、検討していきたい。
（梶村委員）第一案みたいなものはいつ頃までに出てくる予定なのか。
（事務局（阿南課長））具体的なスケジュールはさらに検討したいと思っている。十分な時間をかけて検討いただけるようなスケジュールをお示ししたい。
（梶村委員）早くたたき台を出していただかないと十分な検討をする時間がないのではないか。いつぐらいまでに出す予定なのか。
（事務局（阿南課長））なるべく早く出したい
（梶村委員）基本構想策定というのが平成２９年度の前半に書いてあるが、中間まとめに対する意見はどのくらいまでの期間を考えているのか。
（事務局（阿南課長））皆様方からご意見をいただいてから考えたいと思っており、具体的には決めていない。
（梶村委員）中間まとめに対する意見の矢印が一本しか出ていないが、一回だけを想定しているのではなく、複数回の継続した討議を考えていると理解してよいか。
（事務局（阿南課長））基本構想策定に関するスケジュールとしては、今日ご説明して、６月中旬ぐらいまでに文書でご意見を出していただき、７月初旬ぐらいに次回の協議会を開催したいと考えているが、その後まだ何回開催するのかは、そのご議論次第だと思う。

（調議長）バックグラウンドチェックに関する基準については、私見であるが、それぞれの施設の位置づけが違っており、国の統一した指針がなく、それぞれの立場で運用を策定しているのではなかったかと思う。

（木須委員）公開質問状に対する回答はどうなっているのか。
（調議長）今回の配付資料の中で回答している。
（木須委員）本年２月に示された生物災害等防止安全委員会からの調査報告が信頼できるかどうかは長崎大学から独立したものであるかどうかということである。今回、事前質問

のところの後ろに回答を回しており、この協議会や議長がこの回答や調査内容に介入していることになり独立していない調査報告になってしまう。

委員長あてに公開質問を出しているので、委員長自身からの回答が欲しい。しかも、事実経過なども書いてなく、他の委員は事情を理解できない。いい加減なことをしないでもらいたい。

（調議長）４月２７日に委員長宛にいただいた公開質問状によれば、協議会でじっくり検討する時間がなくて、次回の協議会で質問するつもりであったが、一向に開催の兆しが見えないので質問状を送ったと書いてある。

（木須委員）その質問は委員長宛にするもので、直接委員長から回答をいただきたい。そうじゃないと独立した報告書にはならない。あなたたちが回答に介入した。

（調議長）介入していない。

（木須委員）言葉だけ言っても駄目。外形的にそういう形をとらないと。

（調議長）公開質問状に関しては、資料６に回答を付けているが、委員長からの回答がご希望ということであれば、その旨、委員長に伝えたい。

（木須委員）独立した調査報告書であるべきということで理解するがよいか。

（調議長）了解した。

(3) 長崎大学の感染症研究拠点の中核となる高度安全実験（BSL-4）施設の基本構想（中間まとめ）について

事務局から、資料５－１、５－２、５－３に基づき説明があった後、議長から委員全員から一言ずつ短めでご意見等をいただきたい旨の依頼があった。

これに対し、概略次のような意見交換があった。

（木須委員）一人一言ずつというのではなくて、質問のある人が手を挙げて質問したらいいのではないか。何で無意味に一人一言ずつを求めるのか。同じ人間がずっと発言しては駄目なのか。

（調議長）全員にご発言いただくことが無意味だとは思っていない。

（木須委員）無意味である。

（調議長）いろいろなご意見をいただく意味は十分あると思う。今日で議論が終るとは思っていない。今日はやりとりする時間がないと思うので、ご意見をいただき、足りない部分については次回までに文書でいただきたいと思う。

（木須委員）文書でやりとりしても、回答を書いて、お蔵に入れるだけである。ここで議論をしたことがない。議論をやりましょう。

（調議長）次回やりましょう。

引き続き、委員全員から概略次のとおり意見等があった。

（石田委員）私のところでは委員会、理事会などで反対意見は出ていない。高尾校区は中間の立場である。

（北島委員）先ほど木須委員から、この協議会には個人の意見だけを言う委員もいるという話があった。昨年、私が発言したことを言っていると思われるが、その時は自治会でこの問題について議論したことがなかったので、この協議会には委員として来ただけで、自治会を代表していないということを発言した。

その後、１年以上が経ち、説明会も開催してもらい、かなり情報も入ってきており、今は役員会等でもこの問題について話をしている状況にある。できるだけ自治会の皆さんの意見を集約した形で、自分の意見も交えて、この場で発言するという方向で出席してお

り、全くの個人の意見だけを言っているわけではない。

（久米委員）基本構想の中間まとめについては十分理解している。

（道津委員）前回この協議会で提案した、BSL-3 実験室の安全性確認のための HEPA フィルターの作動状況の確認、排水処理における滅菌状況の確認、動物実験室のウイルス検査等は、何時何処で行われるのか。

BSL-4 施設の排気には HEPA フィルターを二重に使用するとのことであるが、給気のフィルターはどのようなものが使われているのか。

（松尾委員）「世界最高水準の安全性」についての評価にあたっては、外部の専門家の意見を聴いて判断する、と書いてあるが、何か逃げた感じに受け取れる。100％の安全はないので、リスクを如何に小さくするか、もう少し提示していただければと思う。

（梶村委員）うちの自治会は目の前にあり、基本的には素朴に嫌で、特に賛成する理由もなく、あえて賛成する気は全くないというのが自治会の意見であった。

４２ページに、発電機は２台あって系統も２つあると書いてあるが、受変電は１台しかない。受変電が壊れたらどうなるのか。

また、前半、時間が押して残り時間が少なくなり、質問は受けないで、全員に一人一言ずつ意見をというのはちょっと乱暴ではないかという気がする。次回もあるというのは分かるが、やりとりをした方がよかったのではないか。

仕事の都合上、開始時間を一時間遅らせていただきたい。

（原委員）ドイツ視察で見聞きした色々な情報があちこちに散りばめられており、よく理解できた。大学が求める施設の姿がやっと打ち出されたと思った。

長崎大学の BSL-4 施設が世界最先端の研究施設として世界に貢献することを非常に期待している。

地域との共生の中で、子ども達に是非色々な教育をしていただき、しっかり物事を見て判断でき、リスクを感情的に言うような大人にならないような子どもを育てるための支援をしていただければと思う。

（犬塚委員）「地域社会との共生」について意見を述べたい。一つは情報開示の在り方である。稲佐地域に住んでいるが、坂本地域と違って、少し離れた多くの市民には設置に関する情報は一向に耳や目に入って来ないというのが実情で、新聞やテレビ、広報誌等でたまに目や耳にするぐらいである。

数多く耳にしたり、目にしたりすることによって関心度が深められ、事の良し悪しが判断できることもあるのではないか。本気で設置を考えているのであれば、是非、周辺住民だけでなく、少し離れたところに住んでいる多くの住民の皆さん方にも、なるほど、こんなことだったのか、それならば、と理解ができる情報を分かりやすくお伝えする方法を考えていくべきではないか。

そのためには、三者協議の中で、大学側に対して、県も市も、公共の立場での制約は在るとは思いますが、もっともっと県民、市民の皆さん方に有効で適切なＰＲ活動の手助けやアドバイスをしていく必要があるのではないか。

私には専門知識はないが、感染症研究は人類にとっては必要不可欠の課題ではないかと考える。大学の長年の研究で蓄積した多くの英知を人間の発展と世界のため、国のため、

そして我が長崎県、長崎市が発展できる礎の中心としていただけるようにして欲しいと願っている。

（山口委員）地域社会との共生という面で、この協議会がどれくらい役に立っているのか非常に疑問に感じた。どうすれば地域の人に理解していただけるか。

本日配付しているパンフレットは、どれくらいの地域の人の目に入っているのか。これを地域の人に読んでいただけたら、BSL-4 施設についての理解がかなり進むのではないかと思う。こういったものを読んでもらうことを考えていただきたい。

（神田委員）印象としては、この施設をものすごく急いで造ろうとしており、何故そんなに急ぐのかと思った。地域住民としては一番何が嫌かというと、やはり何か起こった時には命に関わる問題であるということである。もう少し丁寧に、走るのではなく、質問も少し受けていただきお答えしていただきたかったというのが感想である。

危機管理上の国策ということで、少し危ないものも感じる。この地区に住んでいる人たちは純粋に、自分が生まれ育ったこの地区にずっと大事に住んでいたい、自分の子孫にもずっとつないでいってもらいたいという気持ちをお持ちであり、これがもう駄目になったら何処に行けばいいのか、と切実に思っている。ひとたび何か起こった時は、この地区だけでなく、市内、県内、日本全体に及ぼす影響は大きいと思うので、説明会を何回したとか書いているが、開催回数と理解度はイコールではない。説明会の中で、疑問、質問、反論がたくさん出たと思うので、もう少し真摯に謙虚な気持ちを持って地域住民との対話などに当たっていただきたい。

何か起こった時に、ここは大学病院が近いということであるが、エボラの疑いのある人を、いくら隔離した施設があるといっても病人がいるところに連れて行くのは大きな問題ではないのか。こういう施設を造るには相当大きなお金と場所が要ると思うが、そういうことを一つ一つ丁寧にクリアしながら、計画を立てるのであれば示していただきたい。決して造ってくださいと言っているわけではないが、もう少し真摯な気持ちを示していただきたいと思う。

（木須委員）一言では言えない。また、こういう直接やりとりをする機会を作るのか。質問を書面で出させて、書面で回答し、それで終わりということはないか。

真実でないことを言っているとしか思えないところがある。先ほど他の委員から大学は信頼できないという話があったが、一つは、必要性を力説するあまりに真実でないことを伝えて煽ってきたからである。

例えば、エボラは空気感染しないと、１８ページに「BSL-4 病原体に、空気感染するウイルスが含まれていないことから」と書いているが、これは事実ではない。何か反論があるか。次回までに答えていただきたい。

もう１つ、世界最高水準を目指す。他とどう違うのか、他は世界最高水準ではないのか。その最高水準でない他と比べて、それよりも少しましなものを造るのが世界最高水準ですか。今あるのはどこか劣っているのか。

（寺井委員）できればあと一週間早く書類を送って欲しかったが、施設を造って、ウイルス対策を何とかしたいという意欲が感じられるよい中間まとめになっていると思う。

先ほど、命の問題であるという話があったが、私はウイルス等の侵入による逆の意味での命の問題を心配しており、早く造っていただきたいと願っている。先日、佐世保で SFTS（重症熱性血小板減少症候群）に感染した高齢の女性が亡くなったというニュースがあ

り、最近、街路樹の剪定とかをした後にマダニに噛まれていないかとか、結構心配になっている。感染症の拠点ができれば、そういう心配も小さくなってくるのではないかと思い、楽しみにしている。

（藤原委員）議長が委員全員に一言短めにということで発言を依頼しているにもかかわらず、全然違うことを言ってみたり、１分が３分や５分になったりしている委員がいる。ルールがわからない人は委員とは言えない。暴言みたいに大きな声を出せばいいというものではないわけで、大人としてルールを守るようにしないといけないと思う。

基本構想はよく出来ていると思う。今後は、問題点を再度よく詰めて、より完璧なものにして欲しい。

（丸田委員）建物をイメージするためにどのくらいの総面積になるのか、ドイツの施設についても施設の総面積がどのくらいあるのか教えて欲しい。

また、非常用発電機はどれくらいの稼動を確保するのか、稼動時間を教えて欲しい。

（里委員）基本構想の方向性については、特に異論はないが、要望を二つ申し上げたい。

これから基本構想から具体化する過程で、その趣旨が反映されるよう、よく留意していただきたい。

広報について、皆さんに知ってもらうのは大変難しい。相当色々なエネルギーを使ってやりながらも伝わらないという現状もある。そうはいっても諦めたら尚のこと伝わらないので、皆さんに出来るだけ伝わるように、他に手段はないのか、もっと強める方法はないのかといったことをもう一度しっかり考えて欲しい。

（鈴木委員）私の役割は原子力の世界での失敗をこの場で活かすことだと思うので、三点申し上げたい。

世界最高水準の安全性を証明するのはなかなか難しい。感染症法の規制がどうなっていて、それが国際的な基準とどう違うのか、あるいは世界で最も厳しい基準があれば、それと比べてどうなのか、ということを分かりやすく説明していただくのが第一である。世界最高水準の安全文化という言葉があるが、リスクを下げる努力を常にいとわず、安全第一を目指し、常に世界のベストプラクティスを共有するという考え方があるので、色々な分野で行われていることを反映し、一番いい方法を採用していくといいのではないか。関連して、リスクアセスメントは非常に重要であるので、もっと詳しく今後説明していただき、世界最高水準の安全文化、あるいは対応策に繋げて欲しい。

二つ目は、地域との共生について、最後の４番目に出てくるが、地域との共生と住民の安全確保が第一で、本当に大事だと思うのであれば、最初の理念のところに是非書いていただきたい。住民との信頼醸成について、先ほどドイツのベストプラクティスの例が出たが、そういうことをこの協議会でも討議して、実践していくのがいいのではないか。

最後に、国際協力に関して、８ページに「平成 13 年の米国同時多発テロ発生以降は、セキュリティ面での懸念から自国の研究者以外の BSL-4 施設使用は厳しく制限され」という記載があるが、もしそうだとすると長崎大学の BSL-4 施設も国際協力はなかなか難しいのではないか。どこまでが制限されていて、制限の理由は何なのか。後半で国際協力を盛んにやると出てくるので、きちんと説明していただきたい。

（福﨑委員）６５ページの「施設における緊急時対策」については、今まであまり議論してこなかったのではないか。施設に関わる研究者の皆さんを守ることが、すなわち地域住民

を守ることになるのは間違いないと思うが、地域住民にとって不安であることも間違いない。

色々なパターンの危機事態があると思うが、それにどう対応するか、こんな記述で済むはずがないので、今から先、十分に議論しなくてはならないし、具体的な案を出してもらわなければならないと思う。

（宮﨑委員）有識者会議の議論の中で、研究するためにウイルスを他所から持って来る時の議論が印象に残っているが、基本構想の中では触れられていないのが気になった。

３９ページに「具体的なセキュリティ確保の方策」が書かれているが、入館時だけでなく、退室する時のチェック体制や、何かミスがあって異常が発生した時に、警告灯が回ったりとか、警報がなったりとか、そういうセキュリティ対策はないのかと思った。

引き続き、議長から、次回は本日のご意見に対する回答を用意した上で議論を行う予定である旨の発言があった後、５月２６日に長崎大学において開催される、エボラウイルスの発見者であるピーター・ピオット氏による長崎大学リレー講座の案内があった。

―以　上―